宮司の経営

ビジネスパーソンに伝えたい神職のわたしが得た仕事の知見

病厄除守護神 廣田神社
第17代宮司
田川伊吹
Tagawa Ibuki

CROSSMEDIA PUBLISHING

はじめに

私は、青森県青森市、県庁庁舎の近くにある、廣田神社の第17代目宮司（ぐうじ）を務めています。私が当社の宮司になったのは23歳のとき。当時、全国最年少の宮司と話題になったこともありましたが、それは私が優秀だったからというわけではありません。先代の父親が病気により急逝したためでした。そう、まだ青二才だった私は、急に宮司に就任することになったのです。

大学の神道文化学部に進学し、神職の資格を取得した私は、「いつかは自分が実家の神社を継ぐのだろう」と思いつつ、それはまだまだ先のことだと考えていました。大学卒業後は、神職としての経験を積むため、神奈川県の寒川神社に奉職。「しばらくは東京でもっと遊びたい」「実家に帰るまでに世界一周旅行にも行っておきたい」などと考えていて、学生気分がまだ抜けていないところもあったと思います。

寒川神社は年間約２００万人もの参拝者が訪れる、全国屈指の大きな神社です。職員の数も多く、１年目は神職見習い（出仕（しゅつし））として、しめ縄などにつける白い紙でできた「紙垂（しで）」の奉製や掃除、荷物運びなど、主に神事、祭事の補助を担当することになります。

ところが、その翌年の平成21年（２００９）に、父親が亡くなったのをきっかけに、図らずも実家の神社の宮司に就任することになったのです。

そもそも宮司というのは、神職の役職のひとつで、神社の最高責任者のことを言います。会社で言えば、社長の立場です。当時の私は、大企業の新入社員から、突然、中小企業の社長になってしまったようなものだったのです。

一般的に宮司に就任するのは早くても40代、多くは50代〜60代です。それが、社会人経験もほとんどない23歳の青年が突然、社長の役割を背負うことになってしまったのですから、はじめは思うようにいかず、失敗もたくさんしました。

神社の仕事だと思って見えていたのはほんの一部分で、実際にその立場になってみると、そのほとんどが「経営」に関すること。しかも、いかに仕事量の多いことかと驚きの連続でした。職員がたくさんいるような規模の事業体でもない限り、本業としての神職の仕事以外に、総務はもちろん、労務や広報から秘書的なスケジュール管理までほぼ一人でこなしていかなければならず、右も左もわからないまま、とにかく毎日がわからないことだらけの苦労の連続でした。

とくに大きかったのが、当時の職員がすべて辞めてしまったときです。私が未熟だったばかりに職員との関係をうまく構築できなかったのが原因でした。

ただでさえ、プレッシャーに心が折れそうになっていたところに、そのような出来事が発生し、一人でこなせる仕事量には限界があり、あのときは自分の努力だけではもう、どうにもならないところまで追い詰められました。

それでも、自分に与えられたこの使命、神様ごとだけは絶対に疎かにしてはいけないと、神明奉仕は妥協することなく向き合い続けました。

すると、そんな私の姿を見て、ありがたいことに、保育士として働いていた姉が、神職の資格を取って、仕事を手伝ってくれることになり、なんとか危機を乗り越えることができました。

実際は半年間くらいだったと思いますが、当時の私は数年も経っているような感覚で、あまりの忙しさで今でも記憶は断片的です。

しかしあのとき、ある意味、開き直ることができ、見栄を張らず、自分らしく「やるしかない」と覚悟が決まったような気がします。

このめぐり合わせを振り返ると、目先の収入だけに走りすぎず、根底に必ず祭りを大切にして祈り続けたからこその結果として、よい出合いやありがたい導きを得ることができたということに気づきました。

そこから、より一層、とにかく神様へのご奉仕を第一にして、理想とする神社にしていきたいと、過去から学び、未来を見据えて、今すべきさまざまな取り組みを行ってきました。

たとえば、新しい取り組みとして、津軽地方の伝統文化である金魚ねぶたを鳥居に１３０個掲げて地域の幸せを祈る新しいお祭りを立ち上げたり、ご先祖様の御霊（みたま）をお祀りし、慰霊する祖霊社を創建したり、海洋散骨などの神道式の永代供養も始めました。ほかにはパラオ共和国で神

仏合同の慰霊祭を行ったり、八甲田山頂上の祠（ほこら）の再建なども行ったりしました。コロナ禍には、ＳＮＳを使って神社からライブ配信やお神札の無料配布を実施。数十年ぶりに復活した境内社の例祭の宵宮（よいみや）（前夜祭）でジャズコンサートを開いたり、お寺や教会とコラボした宗教音楽フェスを開催したりしたこともありました。

神様のため、神社のため、そして地域の人々のために、さまざまなことにチャレンジしていくにつれて、ありがたいことに参拝してくださる方々も徐々に増えていきました。その結果、年間の収益は宮司就任以来約15年、右肩上がりに成長し、その額はおよそ6倍近くとなり、正月以外ほぼ受ける人がいなかったお守りなどにいたってはその頒布数は30倍以上を達成し、今も伸びています。そのことで、境内の修繕や朽ち始めていた神社を修理することができました。

また、ＳＮＳのライブ配信がきっかけで佐賀県の福母（ふくも）八幡宮宮司の妻と知り合えたうえに、今年、待望の第一子を授かりました。私生活においてもよいご縁をいただいて、幸せを感じています。

困難が降りかかってきても、常に神様に向き合いご奉仕する姿勢だけは崩しませんでした。すると、結果、よい導きがあり、助けられることがありました。以来、神社のためにいろいろな取り組みや挑戦をし続けてきました。

宮司が普通の経営者と大きく違う点は、信仰でしょう。信仰という大事なものに気づき、これは会社の経営やビジネスパーソンの働くということにも通じるのではないかと思うようになりました。

だからこそ、このタイミングで一度立ち止まって振り返ることが必要なのではと思ったのがこの本をまとめたきっかけです。うまくいっている今こそ、宮司としての役割を見失わないよう、これからの神社に求められること、自分がやるべきことを改めて、考えてみようと思ったのです。

そして、今までの経験のなかで得た知見が、誰かの役に立つのであれば、これほどうれしいことはありません。

全国に8万社あると言われる神社の課題や状況は地域によっても千差万別ですので、本書で紹介する内容がすべての神社に当てはまるわけではありません。

しかしながら、時代がすさまじい速さで流れ、世の中の移り変わりの予測が困難になってきている現代。１０００年続いてきた神社の「経営」を次代につなぐ今の取り組みが、一年一年確実に廣田神社を隆盛させていることは間違いありません。

ですので、神道の精神や神社経営にかかわる知見は、宮司の方だけではなく、一般企業の経営者やビジネスパーソンの方にもきっと参考にしてもらえるのではと思っています。

私が神社経営から学んだ知見を公開することで、経営するということや働くということ、そして、生きるということへの向き合い方の参考になることがあれば、幸いです。

はじめに……002

第1章 ワーク・ライフ・バランスは、神道の考え方を取り入れると、うまくいく

なぜ、うまくいく人は神社へ行っているのか……014
日本人に根付いている神道のメンタリティ……019
神道からみるワーク・ライフ・ハーモニー……023
四季のリズムで働き、休む……027
暮らしに生かす神道の作法……030
神棚・お守りがもたらす効果……035
言霊のあるコミュニケーション……039

第2章 宮司の仕事とは 宮司さんって何しているの？

私が「宮司になろう」と思ったきっかけ……044
宮司の一日……048
神社経営の現実……051
宮司と経営者の共通点……054
伝統と革新……059
神道的リーダーシップ……063
自然信仰とサステナブル経営……067

第3章 神社とお金 財政難の神社を黒字化する経営戦略

単なるビジネスじゃない　神社経営の内幕……072
42・5%は兼業宮司!?……076
黒字化への道……081
選ばれる神社へ……085
行政との連携……089
クラウドファンディングで立て直す……093
未来への投資……097

第4章 神道と理念 意外に似ている経営者と宮司

神道流パーパス経営……102
宮司と経営者が挑戦すべきこと……105
神道的理念のすすめ……109

経営と理念を両立させる……112
神道的シナジー効果……117
宮司的組織マネジメント……121
神道でメンタルを安定させる……124

第5章 地域との連携 祈りと祭りでコミュニティーを生かす

地域に生きる……130
祈りと祭り……134
祭りの灯を絶やさない……138
ハレとケの日をプロデュースする……141
伝統文化を楽しく学ぶ……145
想いでつながる神社にする……149

ふるさとの神社を守るという使命……153

第6章 現代版 神道のある暮らし 心の整え方から幸せになる作法まで

心を整える……158
みんな、「授かりもの」……163
言葉が人生を変える……167
出合いの紡ぎ方……171
幸せになる作法……176
ありのままに身をまかせる……179
神様と対話する……182

第7章 未来の神社
個人からコミュニティー、自然資本へ回帰する

神道が経済を潤す……186
自分を取り戻し、心を整える……192
妊娠・出産・育児、命を紡ぐ神社……196
神社が担う、新しい「道」の学び舎……200
「今の祈り」を祭りにする神社……203
自給自足経済を産む神社……208
自然と社会と人とをつなぐ神道……212
おわりに……216

編集協力　小川由希子
校正　RUHIA